

「アナグリフによる地形の観察(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ほとんどの子どもにとって、アナグリフのような立体視は、初めての体験だろう。単なる平面の紙に印刷された地形の画像が、2色のメガネをかけた瞬間に、突然立体的に浮かんで見えるのだから、その驚きは相当なものに違いない。

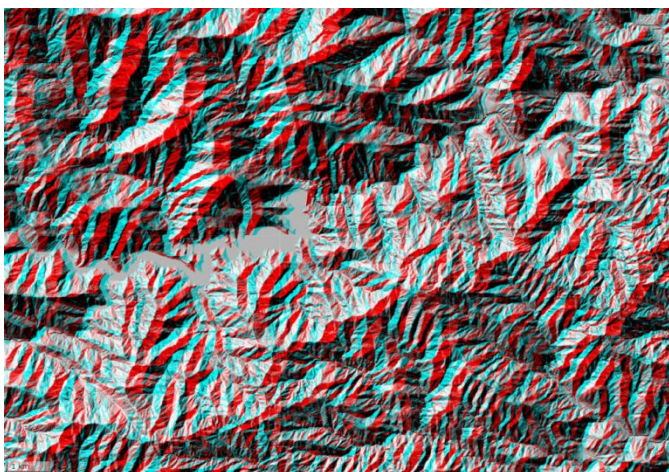


「うわあー、3Dに見える！何これ〜!?」

「うわ、うわ、うわ！山がでっかった！」

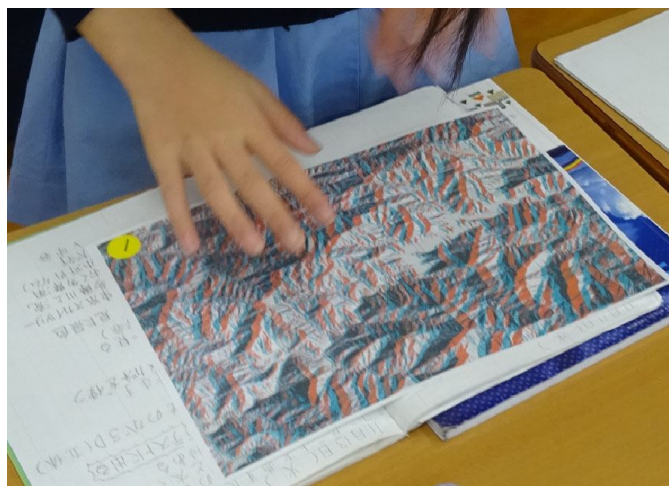
「何これ、スゴっ！触ると痛そう。」

教室中がちょっとしたパニック状態だった。



(2ページ目に拡大画像)

最初に配布した、多摩川上流の奥多摩湖(小河内ダム)付近は、浸食が非常に進んでいて、大小のV字谷が多数発達している。日本各地の山地の典型的な地形の一つだ。メガネをつけて見ると、小さなV字谷(枝沢)はやや大きな谷に合し、最終的には多摩川本流が奥多摩湖に合流している様子が、非常によくわかる。



子どもたちは、しきりに紙のやや上の宙で手を動かしていた。アナグリフ・メガネで見ると、山頂や山嶺が紙から数cm浮かび上がって見えるのだ。それを触ろうとするのだが、それはもちろん「幻」で、山の中を指がすり抜けてしまうだけだ。



アナグリフは、観察者(視点)と対象(画像)の距離が遠いほど、強い立体感が得られるという特性がある。このように画像を床に置いて見ると、地形の凹凸がより強調されて見えるのだ。



結果、どのクラスでもこのような光景が見られた。しかし、画像が遠いと、地形の詳細は見えにくい。やはり机の上に置いて、座って観察したほうが良いだろう。



